

私の本職は大学で働くことだが、ご依頼をいただいで、高校生や中学生、たまには小学生に話をする。

現在、多くの学校が「キャリア教育」に力を入れている。文部科学省によれば「将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力」を身につけるのが、キャリア教育だという。少々わかりにくい。

このキャリア教育の一つとして講演を依頼されることが多い。そもそも「キャリア」とは何だろう。日本キャリアデザイン学会監修『キャリアデザイン支援ハンドブック』（ナカニシヤ出版）には、キャリアの説



玄田 有史

読書術の半歩遅れの

明がなされている。ラテンの語源は「荷車」や、馬車が行き来する「道」そのもの

のであるという。道に刻まれる「轍」こそ、キャリアの語源という考えもある。いずれにせよ、人生という長い道のりを、自分の足で一歩ずつ進んでいけるようになることが、キャリア教育の目的なのだ。人生という長い道は、多

くの場合、見通しのよい高速の直線道路などでは、けっしてない。曲がりくねって、視界も不透明で、何本もの分かれ道が突然に現れるような道だ。途中では、必ず「迷っ」し、とても「悩む」。だからこそ、キャリアを考えることの本質とは、人生で迷い、悩んだと

「キャリア」とは何か

迷ったら危険な道を選ぶ

本はずっと多くの迷いのなかにあった。自分はいったい何なのか。生きるとはどのようなことなのか。そして25歳のある日、パリのカフェに斜めに差し込む薄い夕陽を浴び、街路を見つめながら岡本は決然と自らに誓うのだ。これからは迷ったら、かならず「危

言えること。自分の子どもが危険な道を選ぶのは困る」。そんな声も聞こえてきそう。けれど、危険な道に挑み、失敗や失望することでも生まれる本当の希望もある。

私自身、初めて就職した学習院大学で、当時の経済学部長だった島野卓爾先生から「ケチな学者になるな」と何度もいわれた

記憶がある。つまりない損得など考えるな。迷っているなら、やってみろ。島野さんの助言は、岡本太郎に通じるところがある。

迷ったときにどう生きるか。今の私の答えは、とにかく「ちゃんとウロウロする」である。（経済学者）

きに、自分だったらどう生きるかという術を体得することにある。

そんなことを生徒や児童たちに話すとき、岡本太郎著『自分の中に毒を持って』（青春文庫）に登場する話を紹介すると反応が大きい。18歳でパリに渡った岡

険な道をとる」と。

なぜ迷うのか。人間は弱い。だからこそ何もなければラクで安全な道を当然選ぶはず。それなのに迷っている。ということは、危険な道こそ、本当の自分の行きたい道なのだ。

「それは岡本太郎だから